
魔術部生徒の人柱 サクリファイス

玉露飴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術部生徒の人柱 サクリファイス

【Zコード】

Z2305V

【作者名】

玉露飴

【あらすじ】

“魔法”は時代遅れとして“科学”が発達した現代。珍しいから、という理由で入部したのは魔法呪術部、通称『魔術部』。しかし、それはこれから起きる数々の受難のはじまりだった

魔法、なんてものは時代遅れだ。

300年くらい前までは現役であつたらしいが、今ではそんな面影は見当たらない。「昔は良かった」から始まる長つたらしい爺さんの昔話を我慢して聞くか、国営の魔法博物館とかに高い入館料を払つて調べれば、そういうものがあつたという過去は確認できるが。魔法　正確には　魔法呪術　は、非常に才能に偏つたものだつた。

部屋を明るく灯すことや、擦り傷を治すことだつて容易じやない。魔力の少ない人がやればろうそく程の灯りも点けられないし、傷は氣休め程度にも癒せない。ましてや、もともと才能が無い人は　魔法呪術　自体が使えない。

簡単に言えば不便だつたのだ。使える人の生活しか豊かにせず、使えない人は一生使えないまま暮らしていく。そんな不平等極まりない文化が紀元前から続いていた、なんていうから驚きだ。

しかし、そんな“才なき人”でも“才ある人”と同じようなことが出来る方法が300年前に開発された。それが　科学技術　だ。

魔法呪術　と比べて、万人に平等に安全でローリスクな　科学技術　はあつという間に世界に浸透していった。かつて日本でおきた急速な文化発展から名前を借りた、“セカンド・フローリング第一次文明開化”という単語が世界史の教科書に載ることになるほどだ。

科学技術　が発展するにつれ、　魔法呪術　は廃れてすたいった。

人々の生活からも、記憶からも消え去つていき、直に恐竜の化石みたいに博物館に展示されるだけの存在となる。

彼女に出会うまでは、俺もそう思つていた。

* * *

「こちわーっす」

「お、来たね玲弥くん。いつもより遅かつたけど、ラブレターでも貰つた？」

「違いますよ、教室掃除をしてました」

「というのは建前で？」

「いや、裏も表も掃除当番ですから！」

思わず大声でツツ「なんだ俺を見てにやははと笑つてるのは魔術部部長、鷹司祈理先輩だ。俺の一つ上だから、今年で17歳になる現役女子高生である。

相手が先輩なので強く言い返すこともできず、俺はいつも様に溜息をついてから、いつも座っているパイプ椅子を引き寄せ、背もたれを前にして座る。ああ、なんか座つたら疲れがどつときた。

「どしたの？」玲弥くん、お疲れなのかい？」

「主に先輩とのやりとりが原因ですが」

「そつかー、妹と2人暮らしさ大変だもんねー」

「……」

会話が噛み合つてないで、とは口に出さない。どうせ出してでも無駄なのは入部直後に思い知つたからだ。というか、今日は本当にだるい。

「いやーそれにしても、総部員数2人というのは寂しいねー」

「そりや、魔術部ですかね」

魔術部、正式な名称は【魔法呪術研究部】だ。普通に略したなら魔研部なのだろうが、祈理先輩いわく「そんな気合の入つた名前はいやだ」とのこと。魔研と負けんを掛けているのだろうか。まつたくもつてどーでも良いと言わざるをえない。

魔術部は文化部となつてこる。部活動の目的は“古き文化である

魔法呪術を調べ、忘れないように後輩へと繋いでいく”という

もの。幽霊部員が集まりそうな匂いがブンブンである。

実際、幽霊部員は結構いたらしが、今は全員パソコン研究部へと流れてしまつていて。

「いつそのこと、部活動の内容をえてみよつかな」

「お、いいんじやないですか？」

「じゃ玲弥くん、よろ！」

「そろくると思つたよ！」

だつて私はそういうの二ガテだしー。と部室用にしては立派な机の上にぐでーと潰れる祈理先輩。机が変に立派なのは、たしか校長室の使わなくなつたデスクをかつぱらつてきたからだとか何とか。しかし椅子は俺が座つているのと同じパイプ椅子である。

「だつて玲弥くん、一応は副部長なんだしー」

「部員が2人しかいませんからねー！」

「あ、お茶欲しいかも」

「びつくりするほど自由奔放！」
フリーダム

期待するような視線を送つてくる先輩に負け、俺は仕方なくお茶を淹れる為に立ち上がる。「さんきゅー」と後ろから氣の抜けた声が聞こえてくるが、とりあえず無視。というより、一々反応していたら俺の体力がもたない。

俺と祈理先輩の分のお茶を電気ポットから注ぎ、湯呑み（先輩持参）に淹れて運ぶ。田の前に出されたお茶を先輩が一口飲むと、ふうーと一息吐く。

「そーいやあ、玲弥くんはなんで魔術部に入部したの？」
ウチ

「それは訊いちゃダメな気がします。今の話の流れ的に」

「いーんだよー。もともと今年はフツーの新入生が入部するなんて、アウトオブ眼中だつたし」

「それはいいのか、部長として」

なんか頭が痛くなつてきた。いや、祈理先輩がこういう人だとは分かつはているが。これがわがままお嬢様の悪戯に悩まされる執事

の心境なのか？ そうだとしたら俺は将来絶対に執事にはならない。
実際にわがままお嬢様や執事が居るのかは知らないが。

「入部した理由なんて、そんな大したことじゃないですよ。今時珍しいなーと思つた、それだけです」「……それだけ？」

「え？」

「え？」

祈理先輩の反応が予想外のものだつたので、思わず聞き返してしまつた。よく分からぬ、なんとも不思議な空気が部室に広がる。確かに、魔法呪術研究部なんてものは今時珍しいが、俺にとつてそれはどこか安心させるような雰囲気を感じから、というのも事実。俺の血筋、九条家は魔法使いだつた。といつてもそれほど熱心に魔法使いをしていた訳ではないらしく、小さい頃に両親から聞いてようやく知つたくらいだ。一応俺も魔法を使おうと思えば使えるのだろうが、やつたことが無いので不明だ。どうせ使えたとしても科学技術主流の現代では無用の長物だし、使えなかつたとしてもそれこそ問題がない。

だから、知りたかったのかもしれない。なんでそんな不必要なものに安心感を抱いたのか。

もちろんそんなこと恥ずかしくて他人に話せたものじゃないから、黙つておく。口は災いの元、しかも祈理先輩に知られたら卒業までネタとしていじられるだろう。

それは絶対に勘弁願いたい。

「……ま、いっかなんでも。んじゃ、今日の予定なんだけど

なんだかんだで魔術部は部活動をしている。そして部長である祈理先輩が今日の活動予定を言おうとした時、先輩のものらしきケータイの着信音がそれに続く言葉を遮つた。

「どうぞ」

「うん、ちょっと」めんね

律儀に俺の許可を求めてきたので、返事を返す。それにしても電話の相手は誰なのだろうか。案外、彼氏とかいるのかもしれない。……なんだろう、その彼氏が哀れにしか思えない。

「あ、うん。……うん、りょーかい。じゃ、予定通り進めるね」予定通り？ これから話す今日の予定と何か関係があるのでだろうか。そうすると、今日は外ですか？

電話を切った祈理先輩はスライド式のケータイをスカートのポケットにしまって……あ、今ニヤツとした。何かもう、嫌な予感しかない。

「ごめんねー、玲弥くん。今日は部活お休み！ 帰つていいよ」「へ？ いやいや、今日の予定はーとか言ってなかつたですか？」「細かいことは気にしないー！ ほら、帰つた帰つたー！」

「え、いや、ちょっと！？」

何か面倒臭いことをされると思つていた俺の予想の斜め上をかつ飛び事實に、一瞬だが思考が停止してしまった。

その隙を突いた祈理先輩は硬直する俺の肩を掴み、回れ右させられた俺はそのまま出入口である自動ドアへと無理矢理押し出される。センサーがドア付近に近づいた俺と祈理先輩に反応して、ドアを静かに開かせた。

「ほい、荷物持つて！ 家に帰るまでが部活だからね！」

「なんなんすか、もう……」

適当に放つておいた俺のバックを拾つてきた祈理先輩はそれを俺へと押し付け、自身もバックを持つて部室から退室する。壁に備え付けてあるキーロックをかけると、ガシャンというドアをロックする音が静かな廊下に響くと共に“locked”とホログラムが表示される。

「んじや、また明日ねー」

「……お疲れ様でーす」

俺としては詳しく述べを訊きたいが、祈理先輩の笑顔が「黙つて帰

れ」と物語っている。これでは恐らく理由を言つてくれることはないんだろうなあ。

仕方ない、今日は大人しく従うとするか。どうせ桜はまだ家に帰つてないだろうし、帰りにスーパーにでも寄つて今日の献立でも考えよう。

「家に帰るまでが、部活だからね」

今日の夕飯の献立を考えていた俺の耳に、そういうて不敵に笑う祈理先輩の声は届かなかつた。

* * *

結論から言うと、今夜の夕飯はハンバーグであつた。

桜にダメ元でケータイに連絡を入れると、即行で返つてきた。その文面がハンバーグ希望と書かれていたので、俺も特にこれといて食べたいものも無かつたので桜の希望通りにさせてもらった次第だ。

帰る途中で寄つたスーパーで材料を買い、レジ袋を片手に帰路へとつづく。春の心地よい陽気から夏特有の焼き付けるような暑さを持ちはじめた太陽も、ビルの街並みの向こうへと沈んでいく。

「明日は晴れ、かな」

確か夕日がきれいだつた次の日は快晴になるらしい。それが事実なのは知るところではないが、もし晴れならば家を出る前に布団でも干していこうか。ついこの前まで梅雨だったので、布団を干すのは久しぶりな気がする。

シャン、と。

異様なほどに耳に付く鈴の音のような澄んだ金属音が、ついさっきまでの日常風景を退けるようにして唐突に俺の耳で響いた。

それは一回だけではない。一定の間隔を空けて繰り返されるそれは、俺の後ろから追いかけてくるようにして鳴つている。ちょうど人が歩くようなスピードで、ぴったり俺の真後ろからだ。

（え、何これ。フツーに怖いぞ？）

表はクールに、裏では冷や汗ダラダラな俺は、背中がチクチクするような感覚を全力で無視しながら歩き続ける。立ち止まつたら刃物でブスリ、とかだつたら怖すぎて泣ける。

そうして不安と恐怖がないまぜになつた俺の歩調は自然と早くなる訳で。通常の五割増しのスピードで歩きながら、見えない後ろの相手の様子を考える。

どうやら俺が早足になつたのに気づいたようだ。鈴の音のような音の間隔が明らかに早くなつていて。

（あーもう、なんだよ。俺がなんか悪いことしたか？）

とにかく、この先の丁字路を左に曲がれば家につく。そこまでの辛抱だ。

（どういうか、祈理先輩の悪戯じゃないだらうな……？）

ふと、俺はそんな可能性を考えてみた。いつもなら何か用事が有つても行われる部活が、今日だけ休み。電話を切つた直後の祈理先輩の笑み。別れ際の「黙つて帰れ」と語つていた笑顔。

（……まじか）

恐らく、黒なのだわつ。

ここ近辺で不審者の噂なんて立つていないし、わざわざ物音を立てながらついてくるストーカーなんものが居るわけない。ましてや俺は男だぞ、妹の桜ならともかくとして。

（曲がり角……だな）

俺は後ろからついてくる人物を祈理先輩と断定して、曲がり角に入る。そしてブロック塀を壁にするようにしてしゃがみこみ、目の

前に現れるのを待つ。

（今までではスキンシップとして割り切つてたけど……。ここまで許すと次からが面倒臭そうだ）

もうすでに祈理先輩のスキンシップは十分面倒臭い領域に入っているのだが、今は横に置いておこう。今までやられっぱなしだったし、たまには反撃してもいいはずだ。そうじゃないと理不尽すぎてもれなく俺の心が折れる。

カシヤカシヤと間隔の狭まっていた音は、俺が左に曲がり姿を見失つたためか小走りな様子近づいてくる。

（バツクと夕飯はここに置いといて。…………今ツ！）

カシヤカシヤという音共に現れた人影の姿を視界の隅に入つた瞬間、俺は飛び出すようにして人影の目の前へと躍り出た。

「どうか、この時俺はよく考えて行動を起こすべきだったのだろう。小走りといえど相手は走っていたのだ。そこに突然何かが飛び出して来たら驚くし、まず走っている人は急には止まれない。」

「へっ！？」

「えっ！？」

結果、俺と人影は盛大に事故つたのだった。俺は中学では普通に運動部に入つていて柔い体つきはしていないはずなのだが、さすがに走つてきた相手とぶつかつたら倒れる。といつても尻餅程度だが。それでもアスファルトの上ではやつぱり痛い。

「痛つてえ……。すいません、大丈夫ですか祈理先輩？」

「うう、不覚をとりました……」

声のする方向、さつきぶつかつた人物がいるはずの場所には、俺が予想していた人物とは全く違うものが尻餅をついていた。

コート、なのだろうか。フード付きのそれで頭をすっぽりと覆っているそれでは顔を確認することは出来ない。まあ声からして痛そな表情をしているであろうことは想像がつくが。

しかし、祈理先輩はこんなに小さいシリエットだつただろうか。

確かに俺よりは身長が低かつたが、それも頭半分くらいだったはず。

こんなに明らかに小さいと思えるようなものでは無かつたはずだ。しかも、祈理先輩の声色つてこんなに高かつたっけか。もしかして、人を間違えたか？

「後を追つていたのに、返り討ちに遭うなんて……」

「うん、分かつた。コイツ犯人確定、どうやらビンゴだつたようだ。よい……しよ、と」

掛け声とともに立ち上がつたそれはコートについたホコリや砂をはたいてから、未だに尻餅をついたまま様子をうかがつている俺の方を見た。

紅玉のよう赤い眼が、その中に俺の姿を映す。

「貴方が、クジョウレイヤですね？」

確認するような声色で、それは俺の目の前まで歩いてくる。白いコートの裾についている金属輪が、歩くたびにカシャンと揺れる。そして田の前までたどり着くと、俺の返事を待つよつとしてその場で直立した。

「……お前は、誰だよ？」

「……そうですね。ジコシヨーカイというものは始めて自分から名乗るものだと、イノリが言つていたのを忘れていました」

白いコートの裾から日焼けた様子のない白い手が伸び、自身がかぶつていたフードを取り去る。それは子供特融の無垢な顔つきの、肩口で切りそろえられた黒い髪をもつ少女だった。

「私は魔動戦姫の宿主。イコノクラスター サクリファイス名前はもう無くしました」

小さく愛らしい唇から紡がれるのは、俺が知らない未知なる言葉。それでも、その時の俺は何か物を言えるような状態ではなかつた。小柄な少女から発せられる、分不相応なほどの威圧感。自分が相対しているのは少女では無く、まったく別の何かだと錯覚させるほどの存在感。

「私からは以上です。では、もう一度問います」

中指にはめられている指輪に繋がれたコートの裾が、その動作に伴つてゆっくりと持ち上がる。それは、これから始まる何かの幕開

けだと示唆するように。

「貴方が、クジョウレイヤですね？」

ピン、と。少女の人差し指が、俺の顔に向けられた。

01・魔術部生徒の出金 Hンカウント（後書き）

よろしければ、「意見や」感想をお願いします。

02・魔術部生徒の困惑 パーツク（前書き）

（前回のあらすじ）

魔術部、通称魔術部に所属する九条玲弥。部長の鷹司祈理の急な帰宅命令により、彼は仕方なく帰路へとつぐ。

その道中、「魔動戦姫の宿主」と名乗る謎の少女と遭遇する。

02・魔術部生徒の困惑 パーツク

「ああ、俺が九条玲弥だが……」

「それはよかつた。もし人間違いだつたならば、また探さねばならないところでした」

そう言う彼女の顔には、少し疲労の色が見えた。いつごろかは分からぬが、ずいぶん長い間俺のことを探していたらしい。

「またつてお前……。まさか、ずっとここで張つてたのか？」

「はい、そうなりますね。……手、貸しますようか？」

「いい。これくらい一人で立てる」

目の前に差し出された手を払いのけ、俺は一人で立ち上がった。服に付いたゴミやホコリを軽く払つて、こんどこそ再び目の前に居る少女と対面する。

身長は中学生くらいだろうか。まあ高校生でも女子ならこれくらいの身長の奴なんているし、第一俺のクラスに現に数名いる。身長からの年齢特定は不確定だらう。

髪の色は、黒というよりは鳥の濡れ羽色に近い。日本人なら理想とも言える髪の色だ。まあ今は髪の染色なんて珍しくないので、純粋に黒なんて人は少なくなつてしまつたが。

それにして、端整な顔立ちをしている。若干幼さが残つてている辺りから、桜の友達か誰かだろうか。いや、桜の友達はちよくちよくウチに来て飯を食つていくから覚えているが、こんな奴いたっけか？

「一応聞くけど、お前、桜の友達か何かか？」

「いえ？ そもそもサクラ、とは何でしようか？」

「いや、何だと訊かれてもなあ……」

なんか、質問をしたはずが質問で返されてしまった。本当に誰なんだ？ この娘は。

「それで？ 僕を探していたみたいだけど、何か用があるのか？」

俺はそろそろ夕飯の準備にかかるなくちゃ いけないんだが」「

「ええ、それほど時間はかかりません。単刀直入に言います」

少女は「ホンと咳払いをすると、まっすぐにその真紅の瞳が俺の目を見る。その雰囲気に当たられてか、俺も自然とその眼をまつすぐに見ていた。

少女の口が、静かに開く。

貴方に私の

ପାଦ ନେହାତେ ନେହାତେ ନେହାତେ

.....

しかしそんな重い空気を打ち破ったのは、少女の言葉でもなんでもなく、元気に空腹を訴える腹の虫の音だった。

しかも 今の音は結構大きかったぞ？ 僕はまだそんなに洞て
ないから、さっきのは僕のものではない。つーか、ここ通りには
俺と少女しか居ないから、自然と答えは出でてくるけど。

「…何か、食べてくか？」

二
「え、や」

少女は紅くなつた頬を隠すよつてひつむきながら、しかしコクリと確かに頷いた。

＊
＊
＊

「んぐんぐ。すいません、今まで何も食べてなかつたので」「ああ、ルートは気にしなくていいぞ。ウチはこういうのばっかりだ

からな

場所は変わつて、俺と少女は俺の家の居間にて軽食をとつてゐる。メニューは出来合わせで作ったサンドイッチとオレンジジュース。俺は甘いものが苦手なので、麦茶を飲んでゐるが。

少女はよほど腹を空かしていらしく、すでに作ったサンドイッチ6個を平らげて、そして今7個目に手を出したところだ。

「ばっかり、といつのはこつも女の子を家に引つ張つて来てご飯を食べさせていふ、といふことですか？」

「ちげーよー? まあほら、ウチは親が居ないからさ。よく友達を呼んで食つてるのや」

すると少女はバツが悪いような表情をして、口元へ運んでいたサンドイッチをゆつぐりと下げる。そして俺の方をムスッとした顔で睨んだ。

「……地雷を踏ませるなんて、最低です」

「え、俺が悪いのか? ……まあ、それ自体は俺も桜も気にしてないから。別段に地雷という訳でもないけどな」

俺の説明を受けてホッとしたのか、少女は下げていたサンドイッチに再びかぶりついた。さつきまでの申し訳ないような雰囲気などどこ吹く風といったように、さつきまでと同じペースで食べていく。「つーか、そんなに腹減つてゐなら今日ウチで夕飯食つてくか?」

「あ、いえ。今日は貴方に話をしにきただけなので結構です」

と、喋つてゐる間に7個目を完食。空になつた右手が、なんの迷いも感じられない動きで8個目へと伸びる。

「……」

「むぐむぐ」

少女は手に取つた8個目のサンドイッチ(ハムと卵マヨネーズを挟んだもの)をかじり、うれしそうに微笑む。ただ食い物を食つてるだけでこんなに笑顔になる奴なんて初めて見たな。まあなんかその様子が似合つてゐるので何とも言わなが。

「それで、その話つてのはなんなんだ?」

「はむ……。あ、はい。お話しますね。端的に言つと、貴方に盟約^{ブレイジ}を結んで欲しいのです」

「……ふれいじ?」

「はい。要するに、宿主^{サクリファイベートナー}の提供者^{サプライヤー}になつて欲しいのです」

「えつ……と、つまりどういうことだ?」

俺の知つている言葉の通りならば、どうやら少女が俺に何らかの協力を頼んでいるということは分かるのだが。

「ちょっと待つてくれ、その宿主とか提供者とか、俺にはサッパリなんだが?」

「あれ、イノリから話は聞いていないのですか?」

「イノリつて……。まさか、祈理先輩のことか?」

「私にはそのイノリセンパイといつものがよく分かりませんが、恐らくその認識で合っています」

俺は全身から力を抜かれたように、座つている椅子の背もたれに力なくもたれかかった。

無理だ。祈理先輩が仕掛けたものであるのならば、俺がそれを解き明かすことなんて出来やしない。なんたつてあの人は、他人をいじつて疲れていくのを見て楽しんでいるような人なのだ。そして疲れ切つてしまつている俺では、どうせ敵^{かな}うはずがない。

「どうしました? 何か疲れたような表情をしていますよ? はむはむ」

「別に……。とりあえず、そこら辺から話してくれないか?」

「分かりました。どうやら貴方は“こちら側”のことは何も知らないようなので、ややぞりくくり目に説明します」

少女は手元にあつたサンドイッチの一切れを食べきり、皿に乗せた最後の一つを手に取る。そして一口かじつた後、少女はそれを咀^くしながら話し始めた。

「イノリから聞いている限りでは、貴方は魔術部に所属しているんでしたね。では、魔力の在り方は知つていますね?」

「ああ、えーと……? 『世界の理^{じとわら}』に干渉して、齟齬^{クモリ}を起こさせ

る因子』……だつたつけか?』

「はい。言つならば“科学技術”側の化学反応、というものに酷似していますね」

少女は俺の言つたことに補足をすると、また一口サンディイッチにかぶりついた。

俺たちの世界での魔力とは、『世界の理に一時的に干渉して矛盾を誘発させ、それによつて得た結果を現象として発現させる』というものだ。

「例えば、燃料も酸素も何もない場所に火を熾す（ひおこす）とします。当然“科学技術”側の觀点からすれば、不可能なはずです。でも“魔法呪術”側なら可能です」

「魔力で『火を熾す』ように組んで、世界の理に干渉させる。そうすれば『熾きないはずの火が熾きる』という矛盾が生まれて、それを目の前に引つ張つてくる。ということだよな?」

少女の言葉をリレーして、俺が知つてゐる知識で魔力の在り方と使い方を説明をする。

「どうやら大丈夫なようですね。では、ここからが本題です」

少女はそういうと、サンドイッチの皿の横に置いてあつたオレンジジュースを両手で掴み、グビグビと飲み始めた。

ジュースを完全に飲みきると、少女はコホンという咳払いの後にようやく本題に入る。

「今、“科学技術”と“魔法呪術”的関係が悪いのは知つていますね?」

「ああ、ニユースでもそう言つてるな」

「……では、“科学技術”が“魔法呪術”に攻撃を仕掛けているのは、知つていますか?」

「なつ!?」

そんなものは聞いていない。恐らく世界中に住む“科学技術”側の人全員がそうだろう。なんたつてニユースでは“科学技術”側と“魔法呪術”側のお偉いさん方による、それに平等な社会構築

のための談義が続いていると報道されているのだ。

誰も“科学技術”による“魔法呪術”側への攻撃、『戦争』なん
てものが起こっているなんて知るはずがない。

「近々、機動戦騎なるものが“科学技術”側では投入されるよう
すね」

「『戦車や戦闘機に変わる、第一次主力兵器』だろ？ まさかそれ
が原因なのか？」

「いいえ。それは我々“魔法呪術”側との抗争によつて生まれた、
血塊の兵器です」

少女は皮肉げにそいつと、今までと違つて少し乱暴にサンドイ
ツチを一口かじる。

「戦争を否定する風潮の中で、なぜ兵器を開発しているのか。疑問
には思ひませんでしたか？」

「でも一応、機動戦騎の導入に反対している政治家とか専門家が

「そんなもの、一般人に気付かれないようにする為の情報操作、粗
末な芝居に他なりません」

これからは他から勝手に流れてくる情報を鵜呑みにしないことで
す、と少女は区切ると、もう残り少くなつたサンドイツチをまた
一口かじる。

「話を戻します。我々“魔法呪術”側は現在、“科学技術”側に押
されている状態です。一刻を争う事態ではないですが、危機的状況
下にあることは確かです」

「……まさか。戦争に協力しろ、とか言つつもりじゃないだろ? な
？」

「見方によれば、そう捉えることもできます

「！ 「冗談じやねえ！」

「ダンツ！ と、俺は声を荒げて思わず立ち上がる。戦争に加われ
？ 「冗談じやない。

「」 いづこちはさつきまで平和に生きてきた一般人だ。急にそんなこと

を言われて「はいそうですか」と首を縦に振るわけがない。

俺には桜を、妹を守る義務がある。父さんと母さんが居なくなつてから今日まで、ずっと一人で苦労しながら支えあって、やつと手に入れた日常なんだ。それをこんな瞬間に失つてたまるか。

少女はそんな俺の様子を見ても、さつきと変わらない雰囲気でサンドイッチの最後の一切れを飲み込んだ。その様子が、今はとても頭にくる。

「落ち着いてください。まだ話は終わつていません」

「ふざけるなッ！ お前なんかに、お前なんかに急に俺たちの日常を崩されてたまるかよ…」

「ツ… … … わかり、ました。今日は失礼します」

「ああ出て行つてくれ！ 今すぐニ…」

少女はどこか表情に陰りを見せると、素直に俺の言つとおりに従つて椅子から立ち上がり、すゞすゞと玄関に向かつて歩いて行つた。見送りなんてしない。ついさっきまでは弁当とか持たせてやろうかとも思つていたが、今はそんなこと微塵も思つてはいない。

「あつ… …

ふと、座つている椅子の背後から少女の声がかかる。返事をしてやるつもりもない。早くこの家から出て行つてくれ。

「サンddieitch、御馳走様でした。では、… … また」

ガチャン、と。ドアが開く音がした後に、ドアが閉まる音が静かな家の中に響いた。

アレは侵略者だ。俺たちの平和な日常を打ち壊し、書き換える。それはだめだ。もうアイツには、桜には酷い思いをさせたくない。学校で友達と駄弁つて、部活をして。休みにはどこかに出掛けて、買い物とかをして。そんな平和な日常を送つてほしいのだ。

「……アレは、アイツは、どうなんだ？」

見た目の年齢は桜とほぼ同じ。でもあの会話の中で時々、少女の表情が大人びたそれに似ていたのを、俺は見ていた。歳相応とは言えないあの表情は、嫌でも頭の中にこびりつく。

ただのサンディッチだけで、あんなに嬉しそうな表情をする少女。いつもあんな風に笑えているのだろうか。

少女は、“科学技術”と“魔法呪術”は戦争をしてくる、と言っていた。

じゃあ、少女の方はどうなのだろうか。
その“魔法呪術”側であるあの少女は、俺達のよつに過ぎているのか？

『“科学技術”が“魔法呪術”に攻撃を仕掛けているのは、知っていますか？』

「……馬鹿じやねえの？」

俺はそう言つと、立ち上がつたままだつた状態から、ドカッと椅子に崩れるよつに座りこんだ。ぼんやりと天井を見上げながら、力なくつぶやく。

「ホント馬鹿だよ。……俺は

後の祭り。

その言葉の意味を思い知られた瞬間だった。

「お前なんかに、ですか」

心の中で、激昂した彼から発せられた言葉が渦を巻く。
元より、最初から了解が得られるとは考えていなかつた。だからこれは当然の帰結だ。

* * *

『どう？ 上手くいっ たー？』

「交渉は失敗です。追い出されるのは想定外でしたけど」

『へーえ。玲弥君つて基本優しいと思ってたけど、そんなこともするんだ』

「あと、サンディッシュが美味しかつたです」

『へ？ ああ。貴女は好きだもんね、サンディッシュ』

彼の家から十分に離れた、人気のない公園でイノリに結果を報告する。

彼と会つた時は夕暮れだった空は今は青黒く染まり、半分に欠けた月が雲の切れ間から顔をのぞかせていた。閑散とした公園を、ほのかな月明かりが照らす。

私はその公園の中にある、わずかに湿り気を帯びている木製のベンチに腰を下ろして、そんな夜空を見上げる。

「……ここは、星が見えないのでですか？」

『まあね。でも、悪くはないよ？ なにより平和だし、楽しいし』

『それは敵の陣地の中に入る者の感想ではないですよ』

『いいのいいのー、気にしない！ じゃあ早く帰還してね。市街ならさすがに攻撃はされないだろ？ けど、いつ狙われるか分からぬし』

「分かっています。では」

『うん、ばーい』

報告を終え、イノリから渡されたケータイの通話を切る。それをポケットの中にしまふと、自然と私の視線は夜空を見上げていた。

星明りの無い、ただ真つ黒に塗りつぶされた無機質な夜空。時々みえる月影も、どこか寂れていますように感じる。

『これが“科学技術”側が見ている夜空、ですか』

“才なき者”が“才ある者”に追いつこうとして、周りを鑑みずには発展を続けた結果。自らの住む大地を汚染し、母なる海を食い荒らし、空の輝きを跳ね返した。

夜になつて冷えた乾ききつた風が私の髪を弄び、木々を僅かにざもてあそ

わめかせる。

「……小腹が、空きました」

私はそう言って、その公園をあとにした。

02・魔術部生徒の困惑 パーツク（後書き）

「」意見や「」感想など、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2305v/>

魔術部生徒の人柱 サクリファイス

2011年8月21日03時32分発行